

沖縄音楽研究の現在－民俗音楽・ポピュラー音楽を中心に－

Contemporary Studies on Okinawan Folk Music and Popular Music

久万田 晋 KUMADA Susumu

(沖縄県立芸術大学 Okinawa

Prefectural University of Arts)

1. 70～80年代の民俗音楽研究

戦後の日本民俗音楽研究では、沖縄の民俗音楽がいかに日本と異なっているのか、という異質性が注目されてきた。有名なのは、小泉文夫の音階理論における沖縄の位置付けである。そこでは、沖縄音楽の特徴とされる琉球音階（ドミファソシド）が、他の三種の音階（民謡音階、律音階、都節音階）と共に日本民俗音楽の4種の音階の欠かせない一要素として設定されている。ここで重要なのは日本民俗音楽という領域が、非時間的で均質な領域として設定されており、沖縄音楽もそれに対応した均質性をもった領域とされていることだ。この認識はたとえば戦前の山内盛彬の沖縄音組織論（S.18）などとはかなり様相を異にする。こうした理論的設定のもと、70～80年代を通じた沖縄の民俗音楽研究は、沖縄音楽という均質領域の日本との異質点をエクステンシブな視点から明らかにする方向（主に小島美子ら）と、それとは逆に一見均質に見えるその内部の多様性を、緻密でインテンシブなフィールドワークによって明らかにする方向が見られた。このどちらも、沖縄の民俗音楽を空間上にマッピング可能な、いわば静態的な領域として把握してきたという共通点を持っている。こうした二方向を集大成した成果として、『日本民謡大観 沖縄奄美』全4巻（日本放送出版協会 1989～93年）が挙げられる。こうした中で、民俗音楽と古典音楽との相互影響関係の研究が手がけられるなど、より動態的に沖縄音楽の世界を捉えてゆく可能性も一部では試みられている。

2. エイサー研究の可能性

沖縄本島の盆踊りエイサーは、地域の青年会が主体となって念仏その他の民謡曲を伴奏に、大太鼓や締太鼓を叩き勇壮に踊る芸能である。沖縄本島各地の多様な芸能は、これまでの緻密な調査によりかなり明らかにされてきた。しかし近年特に注目されているのは、エイサーが戦後の沖縄社会の激動の中で、その社会的意味や芸能が不断に変化してきている点である。つまりエイサーを、現代の沖縄人の主体的な文化運動として、その変動の様態を捉えていこうという見方である。エイサーを、地域の伝統を継承する「民俗芸能」としてではなく、現在の社会状況の中で沖縄人らしさ（エスニシティ）を積極的に表現する「民族芸能」として捉える方向ともいえる。また近年エイサーは、従来の地域共同体主体のエイサーだけでなく、80年代以降、希望者が自由に参加できるクラブチーム型の団体が現れ隆盛を極めている。さらに沖縄本島に止まらず、もともとエイサーのなかった宮古・八重山・奄美、そして首都圏や京阪神など沖縄系の人々が多い地域、さらには海外（ハワイ、米国西海岸、南米各国）にまで広がってきている。こうした地のエイサー活動を、一

種のディアスポラ文化、あるいは沖縄文化の普遍化として捉えてゆく研究も今後望まれる。

3. 沖縄のポピュラー音楽研究

沖縄では昭和以降、普久原朝喜（1903-1981）により新民謡（創作民謡）の道が開拓された。戦後になって、レコード・ラジオ・テレビといったマスメディアを通じて新民謡が次々と創作され、現在に至るまで精力的に新作が生み出されている。この新民謡においては、従来の民謡の様式から大きく発展あるいは飛躍し、欧米のポピュラー音楽や日本の歌謡曲のスタイルが積極的に導入された。マスメディアを通じて発達展開した新民謡の包括的研究は、現代沖縄社会における音楽受容の動向を明らかにするうえで重要な課題であるが、まだ端緒についたばかりである。

また1970年代以降、沖縄ポップという沖縄の民族性をより対抗的に打ち出した音楽ジャンルも登場し、80年代後半～90年代を通じて隆盛を迎えた。ここでは沖縄の民族性表現が、新民謡にもまして音楽家の主体的な意識によって構築される。そのため、非沖縄的な要素と沖縄的要素が自由に組み合わせられ、混淆され、あるいは峻別される。こうした多様なあり方をどのように位置付けてゆくか、また他の表現領域や社会的現象との相互関係をどのように明らかにしてゆくのか、これらの現代的課題が今後の沖縄音楽研究には問われている。